内陸地域における貝塚の形成と海産資源の流通
－鹿島川流域の縄文中・後期主鹹貝塚の成り立ち－

宮内　慶介・吉岡　卓真

はじめに

印旛沼沿岸には縄文後晩期の遺跡が群集し、これらは土器塚をもつ遺跡、大形竪穴建物址をもつ遺跡、土偶を大量に保有する遺跡など、それぞれが個性ともいうべき特徴をもち相互に補完し合う関係の上に地域社会を形成していたと考えられている（阿部ほか2001）。

さて印旛沼周辺に形成された遺跡群の中で集落遺跡と考えられるものには、大小の差はあれ貝塚が残されている。すでに発掘されたいくつかの貝塚の報告や踏査を通じて、これらの貝塚が汽水産のヤマトシジミを主体とすることも明らかとなっており、当時汽水化の進んだと考えられる印旛沼にその採集地が求められている。しかし汽水域である印旛沼に臨み、海から遠く離れた内陸に位置するにもかかわらず、印旛沼周辺に形成された貝塚には鹹水産の貝が認められるのである。しかも鹿島川中流域に位置する四街道市千代田遺跡の一画に形成された八木原貝塚では破格の量の鹹水産貝類からなる厚い貝層の堆積が確認されている(注1)。

ではこれら内陸に形成された貝塚にみられる海の貝はどこからもたらされたものなのであろうか。これは印旛沼周辺遺跡群における貝塚の形成背景とともに、遺跡群を越えた物資の流通から当時の社会を考えるための重要な問いかけである。

千葉市にある野呂山田貝塚と八反目台貝塚は鹿島川最奥に位置するにも関わらず主鹹貝塚であり、また東京湾へつながる都川と鹿島川が最も接近する場所に位置するなど古くから注目されてきた遺跡で（川戸1961、田中1984・1985）、この問いかけに対して多くの情報を与えてくれると思われる。そこで生態系をこえた水産資源の流通の解明を目的とした踏査を行った。(注2)

1．遺跡の位置（第1図）

印旛沼に注ぐ鹿島川を河口から上流に25km程遡った所に野呂山田貝塚は所在し、八反目台貝塚はさらに1.2km程上流に位置する。この地域は鹿島川と都川が最も接近する分水嶺にあたり、都川流域には加曽利貝塚や多部田貝塚など鹹水産の規模の大きな貝塚が数多く存在している。

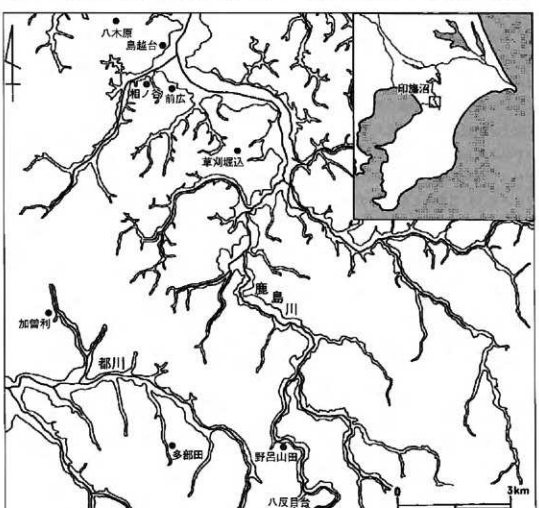
鹿島川を北に下っていくと、順に佐倉市草刈堀込遺跡・四街道市前広貝塚・同じく今回踏査成果を報告する四街道市相ノ谷遺跡・四街道市鳥越台貝塚・八木原貝塚といった遺跡が存在する。これらは印旛沼周辺遺跡群の一部であり、前広貝塚・鳥越台貝塚・八木原貝塚からは、鹹水産貝類を含む縄文後期に形成された貝塚が確認されており、野呂山田・八反目台貝塚との関係も指摘されている（阿部1994）。それでは次に具体的な踏査の成果をみていくことにしよう。

2．八反目台貝塚の踏査成果

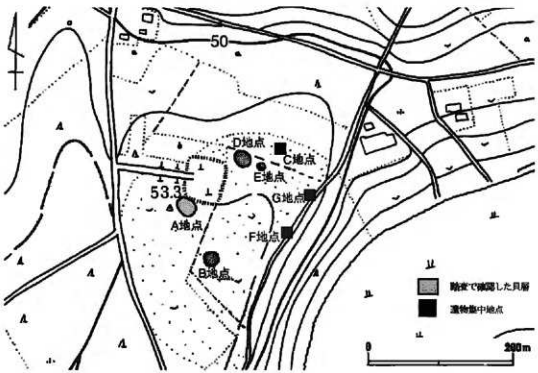
a）立地と広がり（第２図）　八反目台貝塚は、印旛沼に注ぎ込む鹿島川と東京湾へ注ぎ込む都川が最も近接する地域に所在する鹿島川最上流の遺跡である。遺跡は鹿島川の左岸、標高約50mの台地上に立地し、水田面との比高差は約10mを測る。

本遺跡は『千葉県埋蔵文化財分布地図(3)』で千葉市内の遺跡として「No.442　八反目台遺跡」と記された周知の遺跡であるが、これまでに正式な調査は行われたことがなく、田中英世氏による踏査報告が本遺跡を知る唯一の記録である（田中1984）。これまでに２ヶ所の貝塚（A、B地点）と１ヶ所の遺物集中地点（C地点）が確認され、縄文中期～晩期中葉の貝塚を伴う集落遺跡であることが報告されている。

我々は、1999年から2002年４月までに計４度にわたる踏査を実施し、貝塚を構成する貝種や



第１図　後～晩期の遺跡分布



第２図　八反目台貝塚の立地と地点分布状況

その形成時期、および遺跡の継続期間を明らかにすることを目的とした表面採集を行った。その結果、新に２ヶ所の地点貝塚（D、E地点）と２ヶ所の遺物集中地点（F、G地点）が周囲よりやや高い位置に立地することを確認した。そして過去の記録と今回の踏査成果を踏まえて遺跡を概観すると、東側の谷に面して周囲の高まりに地点貝塚と遺物の集中地点が環状に分布する径200mあまりの規模を持つ遺跡であることが明らかとなった。

b）採集された遺物（第３・４・５図）　それでは採集された資料から各貝塚の時期を確認し、遺跡の継続期間について考察しよう。東側の谷から最も奥に位置するA地点は、かつて住居址内貝層の存在が指摘された地点である。ここからは２点の遺物が採集された（第３図１、２）。共に加曽利B2式に比定される。１は縦線文土器の頸部で、粗い縄文と条線を伴う。２は無文浅鉢の口縁部で、頸部には削り痕を残す。内面の段差は消失しており、幾分新しい様相を示す。

B地点の貝塚は、過去の報告で遺物が採集されなかったため貝塚の時期が不明であった。３は粗い縄文を伴う縦線文土器で、外面には貝層のカルシウム分が付着しており、貝塚の時期を考える上で重要な資料である。４は斜線文が描かれる鉢形土器で、共に加曽利B2式に比定される。波頂部に刻み目を伴う５は安行3a式の鉢である。

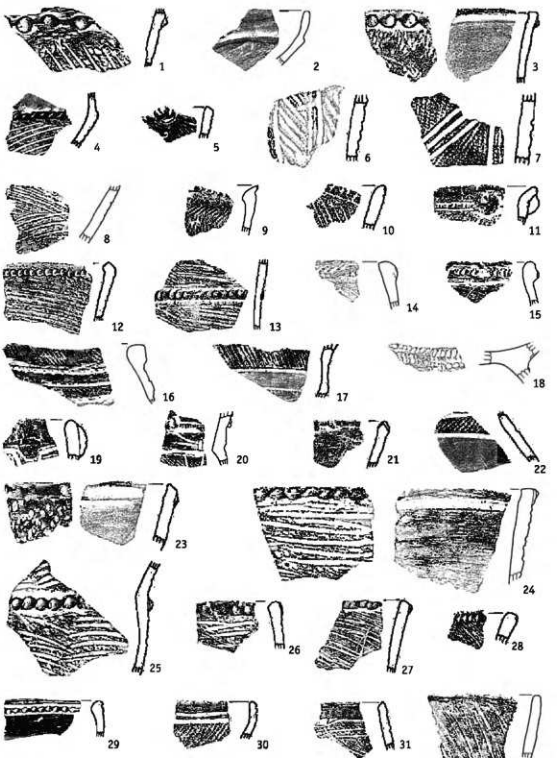
C地点は遺跡の最も北側に位置し、後期前葉～晩期中葉にわたる時間幅のある遺物が採集された（６～21）。懸垂する沈線間に斜線を充填する６および、３本一組の沈線で文様を描く７

は、共に堀之内１式の深鉢胴部である。斜線文を伴う８は加曽利B2式の鉢。口唇部に刺突列を伴う９、10は、同３式の波状縁深鉢。口縁部に貼付けを伴う11は曽谷式で、瘤の上にも縄文が施文されており、安行式の瘤とは区別される。12、13は曽谷～安行１式である。前者は口縁部の屈曲部に刻み目を伴う付点紐線文土器であり、内面の肥厚は内面沈線の形骸化したものであろう。後者は紐線文土器で、条線と粘土紐の貼付けの施文順序が、加曽利B式と逆転している。14、15は、肥厚させた口縁部に薄く粘土紐を貼付け、その中央部分にのみ押捺を加える安行２式の紐線文土器。16は瓢形土器、17は台付鉢の頸部、18はその基部で、すべて安行１式。安行２式の19は内彎する深鉢、20は波状縁深鉢の頸部。口唇部に２個１対の貼付けを伴う21は、安行3b式の鉢ないし深鉢である。

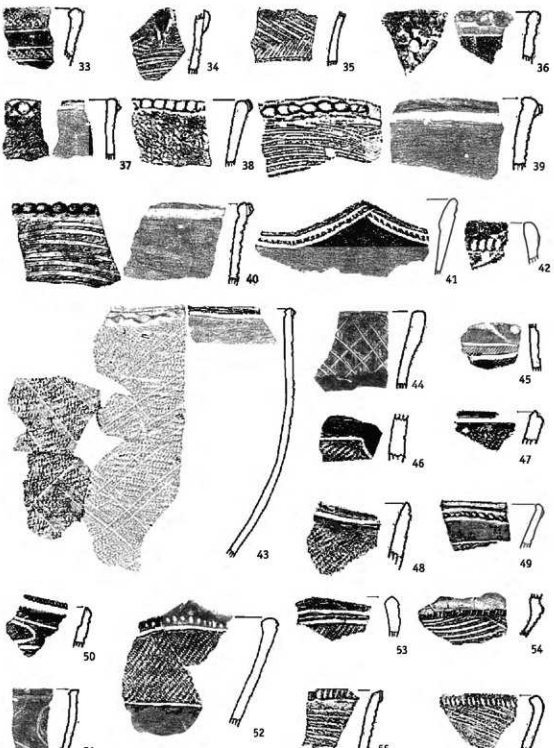
D、E地点は、今回の踏査で新に発見された貝塚で、北側の雑木林の中に位置する。E 地点は規模が小さく遺物は採集できなかった。D地点採集資料（22～35）のうち、22～26が加曽利B2式。22はソロバン玉形土器の頸部で、以下紐線文土器である。23は外削ぎ状の口縁部形態をしていて古い様相を持つ。工具の背面を使用した条線を施し、新しい様相を示す24、25は口縁部が外反し、26は内彎した器形をなす。曽谷～安行１式に比定される27は紐線文土器で、28は付点紐線文土器。29は二条の沈線間に刺突列を伴う瓢形土器、30は二条の沈線が周回する丸底の鉢で、共に加曽利B3式。31の瓢形土器、32の浅く密な条線を伴う深鉢は曽谷式。33は帯縄文がめぐる平縁深鉢、34、35は波状縁深鉢の頸部で、すべて安行１式である。

F、G地点は遺跡の東側に位置し、そこには谷に沿って農道があり、その切り通しに遺物包含層が露出していた。36～42（F地点）、43～45（G地点）はその切り通しから採集したものである。縦にも粘土紐の貼付けを伴う36は加曽利B1式。37、38は粗い縄文のみを施文するもの、39、40はそれに条線を伴うもので、前者はヘラ状工具で、後者は工具の背面を使用して施文されており、前者から後者への変化が推測される。すべて加曽利B2式。二条の沈線間に刺突列を伴う41は加曽利B3式の深鉢であろう。薄く貼付けた粘土紐の下端のみを押捺する42は、安行3a式である。43は、半截竹管による条線を伴う波状口縁の紐線文土器で加曽利B2式の中で古い様相を示す。44は地文の縄文と、無文帯を区画する沈線を消失した格子目文を描く深鉢で加曽利B2～B3式。玉抱き三叉文を伴う45は安行3a式である。

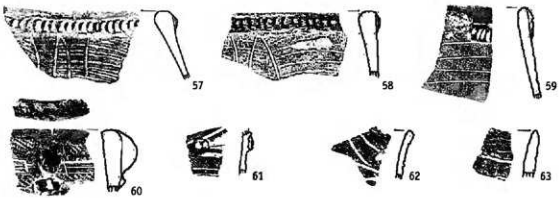
46以下は、地点を問わず遺跡から採集されたものである。46は称名寺１式の胴部。47、48は口唇部に沈線が周回する堀之内１式の深鉢。内面に屈曲を伴う49は、堀之内２式の朝顔形深鉢。50は加曽利B1式の深鉢で内文は衰退し段差のみとなる。51は「つ」の字状の磨消縄文が施された鉢、52は肥厚した口縁部に刺突列がめぐる波状縁深鉢で、共に加曽利B2式。53は波状縁の丸底の鉢、54は台付鉢の頸部で共に加曽利B3式。55、56は曽谷～安行１式の紐線文・付点紐線文土器。57、58は肥厚させた口縁部に薄く粘土紐を貼付け、粘土紐全体に密な押捺を加えるもので、後者のほうが条線の間隔が開く。共に安行２～3a式。59は薄く幅広の粘土紐を貼付



第３図　八反目貝塚採集遺物(1)　S＝1/3



第４図　八反目台貝塚採集遺物(2)（43はＳ＝1/4　その他Ｓ＝1/3）



第５図　八反目台貝塚採集遺物(3)（Ｓ＝1/3）

けた後、その下端のみに押捺を加える安行３a式で条線はさらに少なくなる。60は内彎する安行１式の深鉢で、61は同２式の波状縁深鉢の頸部。沈線のみで稲妻状の文様を描く62は、姥山Ⅲ式の波状縁深鉢。沈線間に列点を伴う63は、安行3c式である。

さて、採集された資料をもとに各地点の貝層の時期を推測するならば、Ｂ地点が加曽利B2式、Ｄ地点は加曽利B2式～安行１式を主体とする時期に形成された可能性が高いといえる。またＡ地点は過去に加曽利Ｂ式～安行式の貝層として報告されており、A、B、Dの３地点は、すべて後期中葉～後半にかけて形成されたものと判断される。そして、過去の報告と今回の採集資料を総合すると、八反目台貝塚の継続時期は中期後半～晩期中葉までといえるであろう。

ｃ）採集された貝サンプルの特徴（第６図）[注1]　次に各地点から採集された貝をもとに、八反目台貝塚の特徴を見ていくことにしよう。踏査によって計測可能な貝が採集できたのは、B、Ｄ地点の２ヶ所であり、A、Ｅ地点の貝は砕片化しており採集することができなかった。ちなみにＡ地点は、現在も畑であり貝の散布が確認できる。Ｅ地点は、貝塚の規模が１ｍばかりの小規模なものであった。両地点は、破片で貝種を判断する限りほぼ鹹水種主体の貝塚である。

遺跡の南側にあるＢ地点は、現在も雑木林の中に位置し、周囲５ｍあまりの範囲に貝の散布が確認された。採集された加曽利B2式の縄線文土器には、貝層を起源とするカルシウムの付着が認められる。したがってB地点の貝塚は、加曽利B2式前後に形成された可能性が高いといえる。発見された主な貝種は、ハマグリ、キサゴ、シオフキ、アサリの４種で、採集された219点の貝のうち、ハマグリが最も多く、68.9%（151点）と全体の７割近くを占めている。次いでキサゴが16.9%（37点）、シオフキ6.4%（14点）、アサリ6.4%（14点）という内訳であった。ちなみに第３回目の踏査で、本地点よりオキアサリが少量採集された。次にハマグリの殻長を見てみよう（第６図上段右）。最も大きなものは、6.8㎝で、最小は2.0㎝であった。おおよそ4.3～4.4㎝を中心に、大形、小形のサイズが少量含まれるという結果となった。

Ｄ地点は遺跡の北側に位置し、墓地の裏手にある雑木林の中に所在する。周囲約５ｍほどの

範囲に貝の散布が認められた。加曽利B2式～安行１式にかけての土器が多く採集されており、貝層はその時期に該当するであろう。本地点で主体をなすのは、ハマグリ、キサゴ、シオフキ、アサリの４種で、Ｂ地点と似た組成を示す。採集された473点の貝のうち最も多かったのはハマグリで、56.0%（265点）、次にキサゴが26.6%（126点）、以下シオフキ8.9%（42点）、アサリ2.1%（10点）と続く。そしてこの地点からは他に、カキ、オキシジミ、カガミガイ、マテガイ、アカニシ、といった過去の報告に見られなかった貝種が少量ながら確認された。また注目すべき貝種として、ウミニナ、アラムシロといった小形巻貝の存在がある。これらは、東京湾東岸地域の貝塚にも少量含まれる貝種であるが、食料資源として考えにくい存在であり、目的とする貝の採集に伴って紛れ込んだ可能性が高いと考えられている（阿部ほか2000）。つまりこれらの存在は、直接採集を行っていたと考えられる東京湾東岸地域と同様の貝の組み合わせがそのままこの遺跡に持ちこまれた可能性を指摘する上で重要な証拠となる。さらにこの２者は、印旛沼の北岸では見られない貝種であり、内陸地域の鹹水産貝類の動態を考えるうえでも、注目される存在である。次に、Ｄ地点におけるハマグリの殻長を見てみよう（第６図中段右）。最大8.0㎝、最小2.7㎝で、ピークは4.0～4.1㎝であった。Ｂ地点同様、ある一定のサイズでまとまるなか、大形、小形のサイズが少量含まれるという様相を示している。

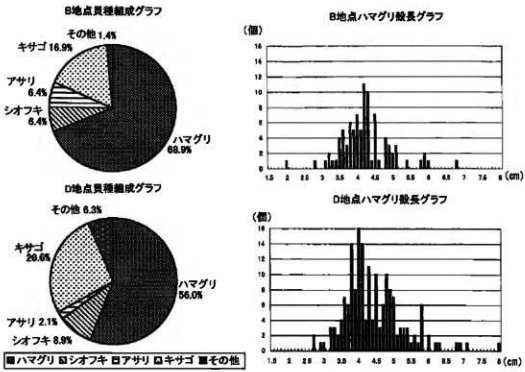
さてＢ、Ｄ両地点を通して貝種の傾向を見てみると、両地点はいずれも同じ生息環境にあるハマグリ、キサゴ、シオフキ、アサリの４種が主体をなしているということがいえるであろう。そして、Ｄ地点で新たに発見されたその他の貝種に関しても、下流に位置する野呂山田貝塚や、笛広貝塚の貝種組成の中で確認される存在であり、汽水産のヤマトシジミが存在しないという点を除けば、鹹水種の組成は他の鹿島川流域の貝塚と同様の貝種で構成されているといえる。

３．野呂山田貝塚の踏査成果

ａ）立地と広がり（第７図）　野呂山田貝塚は鹿島川を北側に臨む標高約32mの台地上に位置し、現水田面との比高差は約７ｍを測る。遺跡は『千葉県埋蔵文化財分布地図(3)』で千葉市内の遺跡として「No.426　野呂山田遺跡」と記載され、1956年には川戸彰氏を中心とする東金高校考古クラブによって唯一の発掘調査が行われている（川戸1961）。また千葉市加曽利貝塚博物館が行った貝塚の分布調査では、台地上に８ヶ所の地点貝塚が確認された。

このうち我々が踏査を行った際確認できた地点貝塚は、台地中央に位置するＡ地点、その北側やや離れたＢ地点、北側斜面に形成されたＤ地点、西側の台地縁辺部に位置するＥ地点の４ヶ所である（第７図）。また田中英世氏に５地点として晩期の遺物が集中すると報告された地点（田中1985）を我々の踏査でも確認できた（Ｃ地点）。これらの地点貝塚や遺物集中地点の分布は環状を呈し、遺物の散布もほぼその周辺、径150mの範囲に認められる。また踏査時の地形観察からは地点貝塚や遺物集中地点が周囲よりやや高まった場所に位置することが確認され

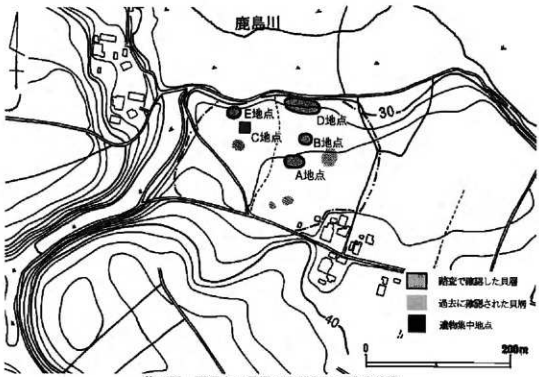
た。さらに後晩期の遺物の散布がみられる畑の土は黒色なのに対し、この範囲から外れる畑の土はローム粒子が混じり黄色味を帯びた色調を呈する。これは佐倉市江原台遺跡でも確認される状況で、「盛土」のような人為的な遺物包含層の形成を意味する現象である（阿部ほか2001）。



	B地点		D地点	
貝種	個数	割合	個数	割合
ハマグリ	151	68.9%	265	56.0%
シオフキ	14	6.4%	42	8.9%
アサリ	14	6.4%	10	2.1%
オキシジミ	3	1.4%	4	0.8%
カガミガイ	0	0.0%	3	0.6%
マテガイ	0	0.0%	3	0.6%
カキ	0	0.0%	12	2.5%
オキアサリ	0	0.0%	0	0.0%
キサゴ	37	16.9%	126	26.6%
アカニシ	0	0.0%	2	0.4%
ツメタガイ	0	0.0%	1	0.2%
ダンベイキサゴ	0	0.0%	0	0.0%
ウミニナ	0	0.0%	3	0.6%
アラムシロ	0	0.0%	2	0.4%
カワニナ	0	0.0%	0	0.0%
合計	219	100.0%	473	100.0%

八反目台貝塚地点別貝種組成表

第6図　八反目台貝塚地点別貝データ



第７図　野呂山田貝塚の立地と地点分布状況

さらにＤ地点斜面下の水田の土が周囲と異なり淡黒色を呈する状況も確認した。泥炭の発達を示すと考えられ、遺跡に付随する水場の存在を想起させる。

b）採集された遺物（第８・９図）　台地中央に位置するＡ地点は耕作による貝の散布とともに多量の遺物も確認された。また一回目の踏査の折、Ａ地点貝塚の脇にゴミ穴が掘られており、掘り起こされた土の中からは後期の土器片が採集できた。このことから良好な遺物包含層の存在が想定される。

１～34がＡ地点採集の遺物である。１は堀之内１式の深鉢、２は地文に縄文を持つ堀之内２式の深鉢である。３～14は加曽利B2式の精製土器。３は地文縄文に水平の沈線を施文、４には向かい合う区切文が見える。５・６は無文浅鉢。７～９は斜線文を施文する土器で、７は文様帯を削りによって作出するのに対し、８・９は斜線を施文するのと同じ工具で文様帯を区画する。10・11は格子目を描く土器。12は頸部無文帯で屈曲し口縁部の開く深鉢の口縁部で、13は台付鉢の胴部。14は口縁に水平の短沈線を施文し、内面には太い沈線が一周する。15・16は下から書き上げるような条線がみられる。ともに加曽利B3式。17も加曽利B3式で、波状口縁の深鉢である。18～25は加曽利B2式の粗製土器。18は地文縄文に半截竹管の腹面で沈線が引かれる。19は口縁部に粗線文が貼り付けられ、以下半截竹管の腹面で波状の沈線が描かれる。20～22も半截竹管の腹面を用いる粗線文土器だが、20は長い沈線を斜めに、21は水平に、22は

水平だが21に比べ密に描く。紐線文も20は細い粘土紐に間隔をあけしっかり押捺するのに対し、21では押捺の間隔が狭まり、22では太い粘土紐をやや浅く押捺するという違いもみられる。また紐線文土器といっても半截竹管による沈線をもたないもの（23・24）や口縁部内彎する器形のもの（24）などその他複数の系列が存在する。25は半截竹管の背面を用いる。26は曽谷式に比定され、紐線文は薄く狭い粘土紐を口唇部ぎりぎりに貼り付け、押捺の間隔も詰まる。また内面沈線も幅広で凹線状となっている。27は曽谷式の瓢形土器。28は曽谷式～安行１式の鉢で、肥厚させた口縁部の中央を凹ませ、隆起した部分に縄文RLを転がす。手法としては隆起帯縄文と同一である。29～32は隆起帯縄文が口縁部にめぐる安行１式。29は瓢形土器、30は口縁部緩く波状する深鉢、31は平縁深鉢、32は鉢形土器である。33は安行１式の台付鉢の口縁部。34は安行２～3a式の紐線文土器である。

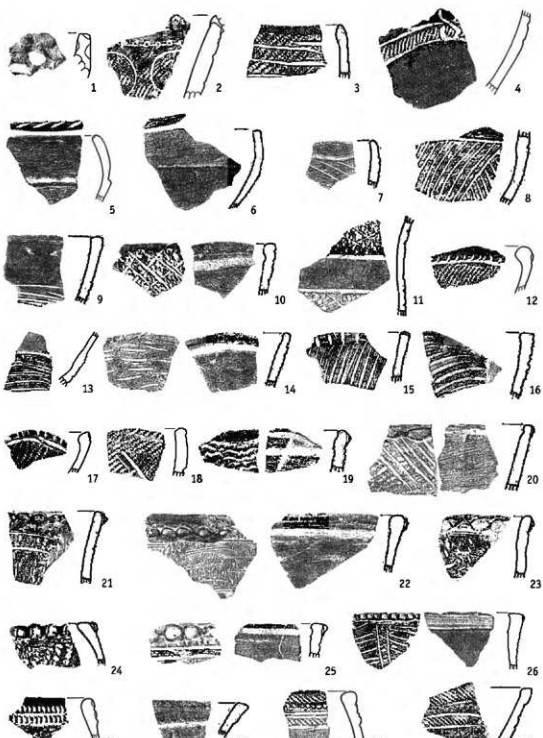
次にB地点の遺物をみていこう（35～39）。B地点では直径１m足らずの狭い範囲で貝の散布が認められたが、耕作による破砕が著しく、形状を止める貝殻は認められなかった。

35・36は曽谷式の波状口縁の深鉢。35は二本の沈線間に、36は二本の沈線によってできた二帯に刻列をめぐらす。37は鉈行垂線を中心に鋸歯状の文様を描く安行２～3a式の深鉢。38は安行２～3a式の紐線文土器。39は加曽利B1式の口縁部片を利用した土製円盤である。

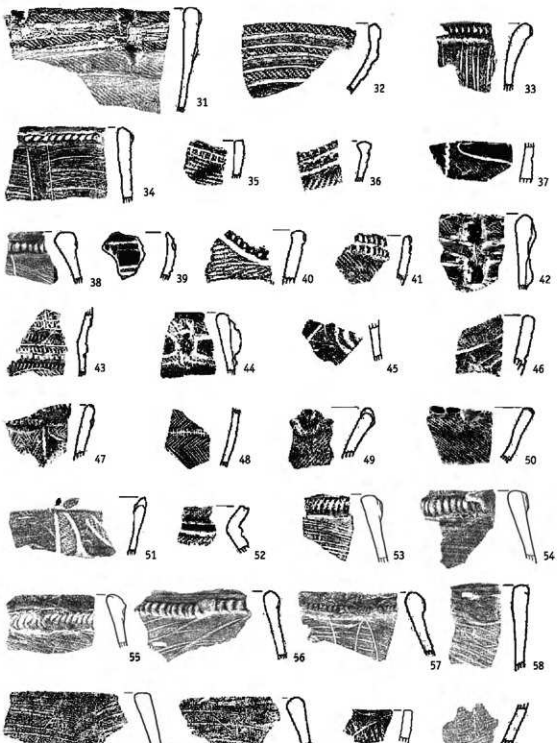
C地点は貝塚の形成はみられないが晩期の遺物がまとまってみられる地点である（40～60）。

40は加曽利B3式の波状縁の深鉢で、波底部には瘤状の突起が貼付けられる。41は40と同じ器形を呈するが二列の刻列をもち、口縁部は薄い作りとなっている。曽谷式であろう。42は安行１式の深鉢で、43は安行２式の波状縁深鉢。44は砲弾状の器形の深鉢で、隆起帯縄文は平滑化の傾向を見せる。安行２式。45は安行3a式の鉢、46は姥山Ⅱ式の波状縁深鉢である。47・48はいわゆる細密沈線文の土器でありともに姥山Ⅱ式。49・50は姥山Ⅱ式の深鉢もしくは鉢の口縁部で、49は鉢巻状の突起、50は扁平な二山の突起が貼り付けられる。51も口縁部に貼り付けられた粘土紐の特徴から姥山Ⅱ式に比定される。52は口唇部に沈線がめぐり、胴部には彫刻的な沈線がみられる。前浦直前型式とされたものであろう。53～57は安行２～3a式の紐線文土器。53は口唇部やや下った位置に幅広の粘土紐を貼付けるが、54では口唇部ぎりぎりに貼付けきれいになでつける。55では粘土紐は口唇部を覆うようにきれいになでつけられ、押捺は粘土紐の下端に加えられるようになる。53～55は粘土紐の貼付け方や押捺する部位に連続的な変化がみられ、この地域の安行２～3a式にかけての紐線文土器の変化をよく示している。56は55と同様安行3a式。57は55・56と異なり、肥厚させた口縁部に粘土紐を貼付けその上を押捺する安行3a式の紐線文土器。58は安行２式、59・60は安行3a式～姥山Ⅱ式に比定される条線のみを施す深鉢のLI縁部である。

D地点は４回にわたる踏査の４回目にして確認された地点で、落ち葉をかき分けてやっと貝の散布を確認することができた。遺存状況のよい貝が大量に散布することから以前川戸氏らが



第8図　野呂山田貝塚採集遺物(1)（S＝1/3）



第９図　野呂山田貝塚採集遺物(2)（Ｓ＝1/3）

調査を行った斜面貝塚であると考えられる。我々の踏査では遺物は採集できなかったが、川戸氏の報告から斜面貝塚の形成時期は加曽利B2式期と考えられる。

E地点も4回目の踏査時に台地縁辺部で確認された小さな地点貝塚である。ここからは61・62の二点の土器を採集した。61は無節の縄文上にヘラ状工具による斜方向の沈線がみられる。加曽利B2式。62は浅い条線が施文される安行1式の深鉢底部付近の破片である。

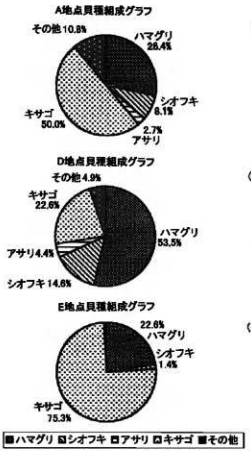
以上が野呂山田貝塚で採集された遺物であるが、田中氏の報告では加曽利E2式や4式の土器もみられ、それらも合わせると野呂山田貝塚は中期後葉～晩期中葉という非常に継続期間の長い遺跡といえよう。さらに各地点に形成された地点貝塚の形成時期を採集遺物から判断すると、A地点は加曽利B2式～安行1式、B地点は加曽利B3式～安行3a式、D地点は加曽利B2式、E地点は加曽利B2式～安行1式にそれぞれ比定できる。このように遺跡の継続期間の内でも、B地点を除く大部分の地点貝塚が加曽利B2式～安行1式という時間幅の中で形成されたことを明らかにしえたのは、これまでの踏査の大きな成果である。

c）採集された貝サンプルの特徴（第10図） 野呂山田貝塚ではA・D・E地点より貝サンプルの採集を行った。A地点は耕作によって巻き上げられたものではあるがかなり濃密に貝殻の散布が認められる地点で、形成時期は採集された遺物から加曽利B2式～安行1式の間と考えられる。ここではハマグリ・キサゴ・シオフキ・アサリを中心にオキシジミ・カガミガイ・マテガイ・アカニシ・ウミニナ・アラムシロ・カワニナ（総数74点）が採集された。割合でみるとハマグリが28.4%（21点）、キサゴが50.0%（37点）、シオフキが8.1%（6点）となり組成の中心をなす。またA地点のハマグリの殻長は（第10図上段右）2.5～6.6cmと幅があるがピークは3.5～4.5cm付近にある。

D地点は斜面に形成された貝塚であり、遺存状況のよい貝が大量に散布していることから、川戸氏の調査の際に掘り上げられた貝と考えられる。形成時期は報告から加曽利B2式に求められる。ここからはハマグリ・キサゴ・シオフキ・アサリを中心にオキシジミ・カガミガイ・ダンベイキサゴ・ツメタガイ（総数226点）がみられる。割合ではハマグリが53.5%（121点）、キサゴが22.6%（51点）と組成の中心をなし、シオフキが14.6%（33点）、アサリ4.4%（10点）とこれに次ぐ。D地点のハマグリの殻長は（第10図中段右）3.5～4.0cm付近にピークをもつ。また7.0cmを超える大形のものも少量ではあるが認められる。

E地点は台地縁辺部の径1m程と思われる地点貝塚で、形成時期は加曽利B2式～安行1式の間である。貝は遺存状況がよくハマグリ・キサゴを中心にシオフキ・アサリ・マテガイ・ツメタガイがみられる（総数425点）。割合ではハマグリが22.6%（96点）、キサゴが75.3%（320点）とほぼこの2つの貝種からなるといえる。ハマグリの殻長は（第10図下段右）3.2～7.8cmと幅を持つが、ピークは4.0～5.0cmである。

以上が採集された貝サンプルの様相であるが、野呂山田貝塚でも汽水産のヤマトシジミは確



貝種	A地点		D地点		E地点	
	個数	割合	個数	割合	個数	割合
ハマグリ	21	28.4%	121	53.5%	96	22.6%
シオフキ	6	8.1%	33	14.6%	6	1.4%
アサリ	2	2.7%	10	4.4%	1	0.2%
オキシジミ	1	1.4%	4	1.8%	0	0.0%
カガミガイ	2	2.7%	2	0.9%	0	0.0%
マテガイ	1	1.4%	0	0.0%	1	0.2%
カキ	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
オキアサリ	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
キサゴ	37	50.0%	51	22.6%	320	75.3%
アカニシ	1	1.4%	0	0.0%	0	0.0%
ツメタガイ	0	0.0%	4	1.8%	1	0.2%
ダンベイキサゴ	0	0.0%	1	0.4%	0	0.0%
ウミニナ	1	1.4%	0	0.0%	0	0.0%
アラムシロ	1	1.4%	0	0.0%	0	0.0%
カワニナ	1	1.4%	0	0.0%	0	0.0%
合計	74	100.0%	226	100.0%	425	100.0%

野呂山田貝塚地点別貝種組成表

第10図　野呂山田貝塚地点別貝データ

認されず、ハマグリ・シオフキ・アサリ・キサゴの４種が組成の中心をなすことが確認できた。さらにキサゴとともにウミニナやアラムシロといった貝がみられることも見逃せない。

４．相ノ谷遺跡の踏査成果（第11・12図）

我々は印旛沼沿岸を中心に遺跡の踏査を継続して行っているが、その中で鹿島川中流域に位置する相ノ谷遺跡において中期の純鹹貝塚を発見した。内陸における鹹水産貝類の搬入形態の推移を考える上でも重要となるため、ここに踏査の成果を報告する。

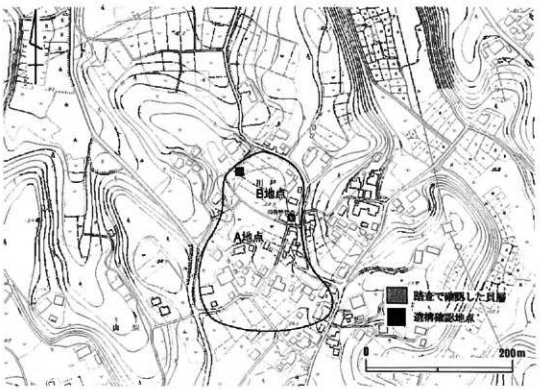
相ノ谷遺跡は鹿島川の支流によって樹枝状に開析された舌状台地上に位置する（第１図）。遺跡は「千葉県埋蔵文化財分布地図(1)」において「No.124　相ノ谷遺跡」と表記される周知の遺跡で、台地の平坦部に縄文時代中期中葉から晩期中葉の遺物の散布が認められる。踏査では東西約150m、南北約250mの遺物の散布範囲の一画、東側から入ってくる谷に面した御岳神社の境内において少量のキサゴが散っている様子を確認した。おそらく小さなブロック状の貝塚であろう。丹念に貝を拾ってみるとキサゴが主体を占め、ハマグリ・アサリの破片がわずかにみられた。周辺から採集された土器は第12図17・18で、17は加曽利E1式に、18は加曽利E3式に比定される。貝塚の形成時期はこれら二点の土器から中期中葉～後葉に求められる。これは構成貝種が印旛沼周辺の中期の貝塚、例えば佐倉市五反田貝塚（小口2001）や佐倉市坂戸念仏塚西遺跡（高橋1999）などと似ていることからも推測される。この貝塚は縄文中期に印旛沼周辺に形成された数少ない貝塚の一つであり、後期以前の印旛沼周辺における貝塚形成を考える上で重要な資料である。

また相ノ谷遺跡においても遺跡の継続期間やそれぞれの時期の立地を調べるため畑の区割りごとに遺物の採集をおこなった。おおまかに南側をＡ地点、北側をＢ地点とする。

Ａ地点では第12図１のような加曽利E1式や、阿玉台Ⅰb式の土器片を利用した土器片錘(2)が採集された。また図示していないが加曽利E3～４式に比定される土器が大量に採集されることから、Ａ地点については中期を中心とした活動の場であったと考えられる。

Ｂ地点から採集された遺物は３～16である。３・４は阿玉台Ⅲ式に比定される。５は加曽利B1式の微隆帯をもつ土器、６は加曽利B1式の組線文土器である。７は加曽利B2式の斜線文の施文される深鉢胴部。無文帯をはさみ胴下半には格子目を描く。８は加曽利B3式の深鉢胴部。９は口縁部を凹ませ、その部分に縄文RLを施文する曽谷式～安行１式の鉢形土器。10～13は瓢形土器の口縁部で、刻列の伴う10は安行１式、隆起帯縄文の平滑化した11は安行２～3a式、平滑化した隆起帯縄文下に沈線による文様のみえる12・13は安行3a式に比定される。14は安行3a式の波状口縁深鉢。15・16は安行3a式の組線文土器である。

このようにＢ地点からは中期中葉の遺物とともに後晩期を主体とする遺物が採集された。採集された遺物から、相ノ谷遺跡は中期中葉～晩期にわたる継続期間の長い遺跡であると考えら

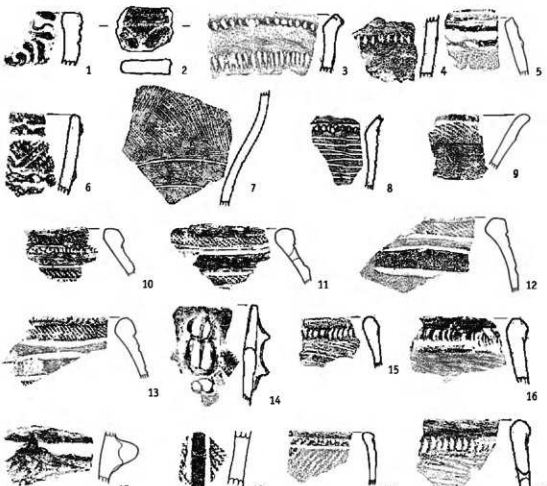


第11図　相ノ谷遺跡の立地と地点分布状況

れる。これとともに踏査時に畑の断面において遺構と思われる落ち込みと厚い包含層の存在を確認した。この遺構付近の崩落土から曽谷式（19）と安行3a式（20）にそれぞれ比定される土器が採集された。遺跡の継続期間および遺構や包含層の存在は、縄文後晩期印旛沼周辺遺跡群の集落遺跡の特徴と類似し（阿部ほか2000）、相ノ谷遺跡もその一員と認められよう。また相ノ谷遺跡では黒曜石の剥片などがかなりの量採集された。相ノ谷遺跡の特徴ともいえる。また印旛沼周辺遺跡群の集落遺跡は規模の大小はあれ貝塚を形成するため、相ノ谷遺跡でも後期の貝塚が残されている可能性が高く、周辺遺跡との関係が注目される遺跡でもある。

5．海産資源の流通と八反目台・野呂山田貝塚の成り立ち（第13図）

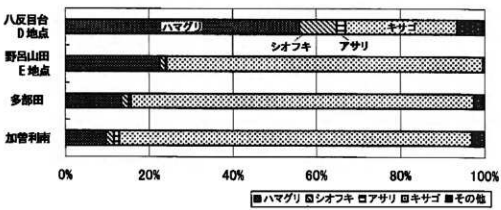
これまで八反目台貝塚、野呂山田貝塚、相ノ谷遺跡の3遺跡についてみてきたが、3者にはいくつかの共通点がある。まず遺跡の継続期間について、いずれも中期～晩期中葉までの土器が散布しており、長期間の継続が想像される点である。さらに前2者に関しては、遺物集中地点と比較的規模の小さい貝塚が環状にめぐる、規模の大きな遺跡であるという点があげられる。これと同様の規模と形状を持つ遺跡は、印旛沼周辺に群集する遺跡で多く確認されており、八反目台・野呂山田貝塚もそれらの遺跡と同様の長期継続型の集落遺跡であると想像される。



第12図　相ノ谷遺跡採集遺物　（S＝1/3）

さて、これまでの踏査で我々が特に注目していたのは、八反目台・野辺山田貝塚における鹹水産貝類の搬入経路についてである。今回の踏査で両遺跡の地点貝塚は、採集された土器から判断していずれも加曽利B式～安行式にかけて形成されたものであるといえる。これは印旛沼周辺遺跡群の貝塚の形成時期とほぼ同時期であり、後期の内陸地域における鹹水産貝類の搬入が加曽利B式以降、顕著に行われるようになったという考えを裏付ける結果となった（阿部ほか2000）。

さてそう考えた場合、この両貝塚への鹹水産貝類の搬入経路を探る上で、両者の貝種組成は興味深い一致を示す。つまり両遺跡共に、ハマグリ、キサゴ、シオフキ、アサリの4種で全体の9割近くを占め、前2者だけで全体の8割近くを占めるというように、特定種を主体とした搬入が行われていたという事実である[3][4]。そして、これらと極めて近い様相を都川中流に位置する千葉市の加曽利南貝塚や多部田貝塚で確認することができる（第13図）[3][5]。これら都



第13図　縄文後期中葉の遺跡別貝種組成グラフ

川水系に見られる貝塚の貝種組成も4種を主体とし、ハマグリ、キサゴの2種で全体の8割近くを占めていることが分かる。こうしたハマグリ、キサゴ、シオフキ、アサリの4種を中心にその他の貝種が少量混在するという状況は、八反目台・野呂山田貝塚と都川流域の貝塚で共通した様相を示していることから、両遺跡に見られる鹹水産貝類の搬入は、従来の指摘どおり都川を介して運び込まれた可能性が極めて高いといえるだろう（堀越1983）[注5]。

ただし八反目台・野呂山田の両貝塚は、貝塚を構成する貝種において都川水系の貝塚とよく似た傾向を示すが、貝塚の形成時期を見てみると両貝塚は加曽利B式以降に形成された小規模な地点貝塚であるのに対して、都川流域の貝塚の多くが加曽利B式以前から形成されているという差異が見られる。こうした八反目台・野呂山田貝塚に見られる加曽利B式以降に形成された地点貝塚の存在は、都川水系よりもむしろ印旛沼周辺地域の遺跡に認められる特徴であり、そうした点において両者は内陸地域における貝塚の特徴をよく示しているといえる。しかしながら内陸地域における貝塚の中で両遺跡の貝塚を見てみると、下流の諸貝塚に比較的多く含まれる汽水産のヤマトシジミが存在しない点など異なる様相も示している。つまり、鹹水・汽水のいずれの生息環境にも適さない地域にありながら、純鹹に近い貝塚を形成する点に、都川と最も近接した鹿島川上流に位置する両遺跡の個性を見出すことが出来るのである。

本論の作成にあたり水野洋幸、遠藤通史、金剛大輔、鈴木宏美、法量郷子（明治大学考古学専攻生）各氏の協力があった。また、発表の機会を与えてくださった加曽利貝塚博物館および同館学芸員の庄司克氏・菊池健一氏には多大なる尽力を賜りました。以上の方々に深く感謝申し上げます。

最後に脱稿報告にあたり明治大学の阿部芳郎先生に日頃より適切なる指導と御教示を賜りました。深く感謝申し上げます。

註

1）八木原貝塚調査団（団長　阿部芳郎）により2000年・2002年に発掘調査が行われ、現在明治大学において整理中。調査では縄文後期中葉～晩期初頭の貝層が検出され、ハマグリ・オキアサリなど大量の海の貝が確認された。

2）踏査は印旛沼周辺地域における鹹水産貝類の搬入形態解明の一環として、1999年12月30日・2001年2月18日・11月4日・2002年4月21日の計4回にわたって継続的に行われた。踏査には以下の方々の参加があった。阿部芳郎（明治大学）、小口英一郎、古谷渉、堀陽子、宮本淳一、矢澤健太郎（当時明治大学大学院生）、相原和範、大久保智之、草薙明日香、篠原武、井上暁雄、青山京介、安部千明、大澤和雅、君嶋論樹、草野潤平、小坂延仁、芝原祐子、高橋明子、田中健一、久島衛、森真由美、山田英雄、水野洋幸、遠藤通史、金剛大輔（明治大学学部生）、池島徹郎（東京学芸大）。この場を借りて感謝を申し上げます。

3）今回の八反目台貝塚・野呂山田貝塚採集の貝サンプルのデータは2002年4月21日の踏査で採集されたものに限る。

4）野呂山田貝塚E地点は、最も遺存状況の良好な地点であり、慎重なサンプルの採集に努めたところ、キサゴが主体を占めるという結果が得られた。一方その他の地点では、キサゴの取りこぼし等の要因で、野呂山田貝塚E地点よりも回収精度が低くなり、ハマグリが主体となる傾向を示した可能性もある。したがって今回の各地点の貝種組成がそのまま貝塚の実態を示しているとは断定できない。正確な各地点の貝種組成は発掘調査によるデータの蓄積を待ちたい。

5）加曽利南貝塚は（樋泉1999）のサンプル9、多部田貝塚は（樋泉2001）のサンプル5 No. 1のデータをもとに作成した。

6）八木原貝塚で大量に出土するオキアサリの存在は、このルートのみでは説明することはできない。内陸地域における鹹水産貝類の搬入は複雑であり、より視野を広げた多角的な分析が今後の課題である。

〈参考・引用文献〉

阿部芳郎 1994「四街道市鳥越台貝塚と鹿島川流域の後期遺跡群」『四街道市の文化財』第20号
阿部芳郎ほか 2000「縄文後期における遺跡群の成り立ちと地域構造」『駿台史学』第109号
阿部芳郎・堺　陽子ほか 2000「遺跡研究の目的と方法を考える」『駿台史学』第110号
阿部芳郎ほか 2001「佐倉市草刈遺跡と縄文後晩期の集落景観」『貝塚博物館紀要』第28号
阿部芳郎 2001「四街道市八木原貝塚の基礎的研究」『四街道市の文化財』第25号
小口英一郎 2001「佐倉市五反目遺跡と印旛沼南岸の縄文中期遺跡群」『佐倉市史研究』第14号
川戸　彰 1961「野呂山田貝塚」『印旛・手賀沼周辺地域総藏文化財調査報告』
高橋　誠 1999『坂戸念仏塚西遺跡』印旛郡市文化財センター
田中英世 1984「鹿島川流域の縄文時代の遺跡－千葉市野呂町八反目台貝塚－」『貝塚博物館紀要』第

11号
田中英世 1985「野呂山田貝塚出土の舟形土器－鹿島川流域の縄文時代遺跡(2)－」『貝塚博物館紀要』第12号
樋泉岳二 1999『貝層の研究Ⅰ』加曽利貝塚博物館
樋泉岳二 2001「動物遺体群の分析」『千葉市多部田貝塚』千葉市教育委員会
堀越正行 1983「谷奥貝塚の意味するもの」『史館』第15号
吉野健一 1998「貝類の組成からみた古鬼怒湾の縄文中・後期貝塚」『貝塚研究』第3号